.R4.6.12

幕末・明治に生きた会津の女性　R4年度会津学知会定例会

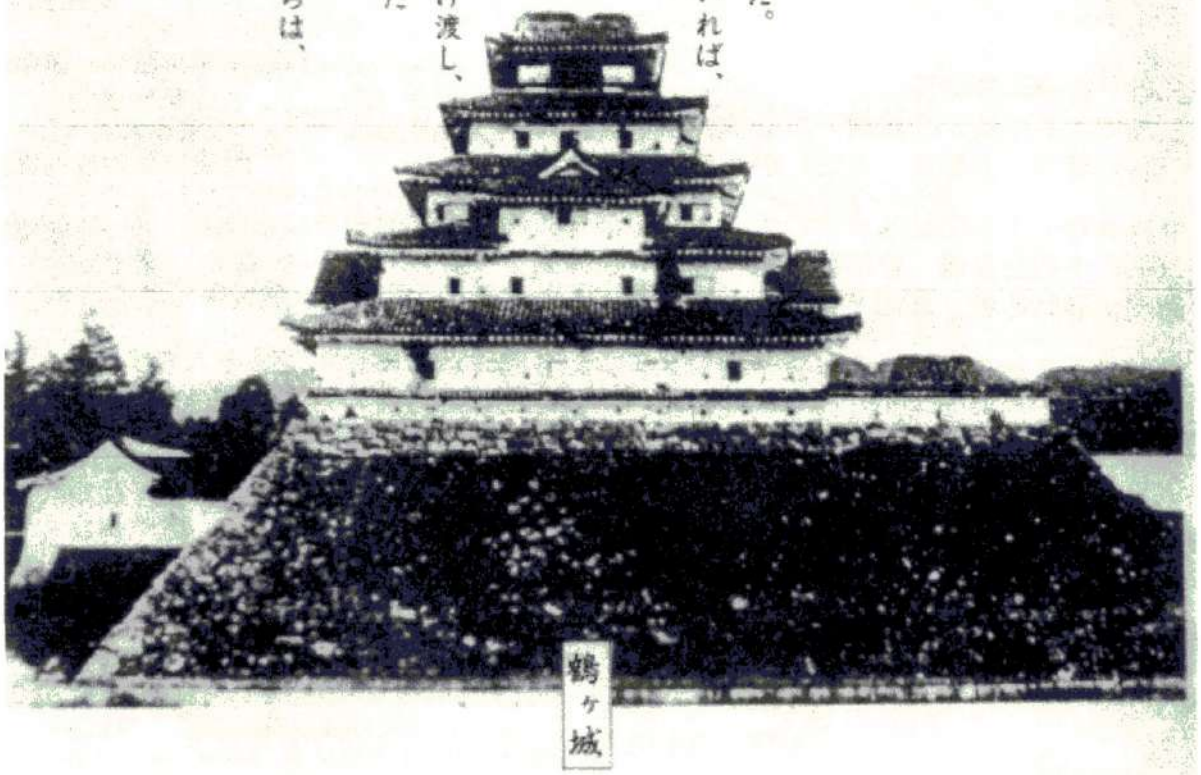
会津学知会　庄司利則

参考文献この資料は、学知会役員会のみの中で使用するものである。　令和4年6月12日
幕末・明治に生きた会津の女性　編集　会津武家屋敷　文化財管理室
発行　会津武家　高木　厚保　会津福家屋敷刊
平成6年月1日第二刷発

いまも語り継がれる会津の女性

社会事業貢献	瓜生　岩子
教育界	新島　八重子、海老名リン
わが国女性留学生第一号	大山　捨松
文学界	若松　賤子

砲弾が雨あられの如く、
鶴ヶ城にふり注いだ。
籠城中の女性たちは、
兵士の食糧を調達し、
負傷者の看護にあたった。
城下では敵と闘う者もいれば、
家族とともに
命を絶つ婦女子もいた。
砲弾を受け
ボロボロになっても、
遂に落城しないまま明け渡し、
一兵の敵をも拒み続けた
名城鶴ヶ城のように、
残された会津の女性たちは、
たくましく
明治を生きたのである。



日本最初の女子留学生

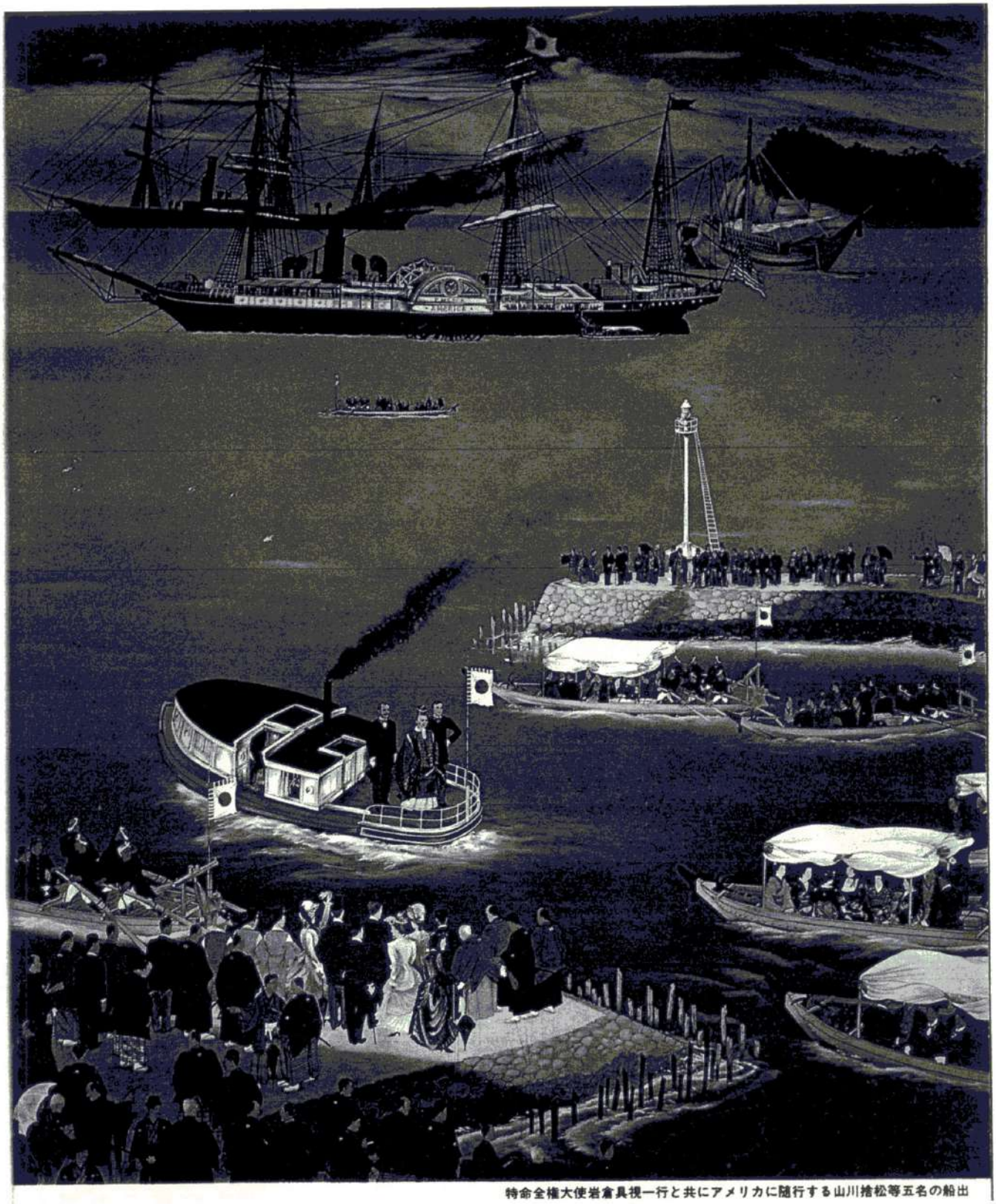
山川捨松

結婚当時の捨松　キヨソーネ筆

神奈川（捨松の実母）

山川捨松は、万延元年（1860年）二月二十四日、会津藩一千石の家老山川尚江重固の末娘として会津若松に生まれた。幼名を咲子という。山川家は、会津藩祖保科正之に代々仕えた家柄で、捨松の祖父山川兵衛重英の時、財政的手腕をかわれ勘定奉行におされ、その後家老に昇進している。父重固は、捨松が生まれる五十日前に病死したため、捨松は父の顔を知らずに祖父と母唐衣に育てられた。捨松の兄姉には、東京高等師範学校長となった長兄の大蔵（のち浩と改名）、日本人で最初にアメリカのエール大学で学位を取り、のち東京帝国大学、九州帝国大学、京都帝国大学の総長を歴任した次兄健次郎、女子高等師範学校の舎監をした長姉二葉、昭憲皇太后の女官をつとめた次姉の操等、優れた人材が多い。

捨松が生まれる前の月に、徳川幕府は日米修好通商条約の批准書交換のため、幕府始まって以来最初の外交使節団をアメリカに送り出している。嘉永六年（1853年）にペリー提督が四隻の軍艦を率いて突如として浦賀沖に現れて以来、日本はすでに外国との関係を無視したまま鎖国を続けることは不可能な情勢になっていたのである。



特命全権大使岩倉具視一行と共にアメリカに随行する山川捨松等五名の船出

幕末〜明治 会津七女性の生涯略年表

西暦	和暦	重要事項
一八二九	文政一二	瓜生岩子、耶麻郡小田付(現喜多方)の油商・若狭屋(渡辺)利右衛門の長女として生まれる
三五	天保六	飯沼(西郷)千重子、会津藩士飯沼粂之進一孝(四五〇石)の次女として生まれる
四五	弘化二	山本(新島)八重子、会津藩砲術指南山本権八の娘として会津に生まれる(兄は軍事取調兼大砲頭取覚馬)
四七	四	中野竹子、会津藩士中野平内の娘として江戸和田倉藩邸に生まれる(妹は優子)
四九	嘉永二	日向(海老名)隣、会津藩士日向新介の娘として、会津若松小田垣に生まれる
五一	四	飯沼千重子(一七歳)西郷頼母近悳(二二歳、後西郷家十一代当主家老)と結婚
五三	六	西郷千重子、これより長女細布子以下二男五女を生む
六〇	万延一	山川(大山)捨松、会津藩郡奉行主役山川尚江の末娘として会津若松に生まれる
		兄に浩(藩家老・東京高師校長)健次郎(東京帝国大学総長)
六一	文久二	瓜生岩子(三四歳)、夫茂助と死別
六四	元治一	島田嘉志(若松賤子)、旧会津藩士松川勝次郎の長女として会津若松に生まれる
六五	慶応一	日向隣(一七歳)、会津藩士海老名季昌(二三歳)と結婚
六八	明治一	八月二三日西軍、鶴ヶ城攻撃に殺到、城下は西軍に包囲される
		同日、西郷千重子一族二一人と共に自刃、時に三四歳、のち、夫近悳長子吉十郎を伴い、箱館五稜郭に向う
		八月二五日、中野竹子、藩の婦女子達の一隊を統率、城外柳橋付近の戦闘に出陣、戊辰の華と散る　竹子の母こう子(夫平内は、江戸常詰勘定役)妹の優子(一六歳)も参戦
七〇	三	若松賤子の母二八歳で、賤子姉妹を残して世を去る
七一	四	山本八重子、在京都の兄覚馬の許に行き、京都府立第一高女の前身・女紅場の教師となる
		山川捨松、岩倉遣外使節一行の女子留学生(五名)に加わり横浜を出帆する(総勢一〇七名)
七二	五	若松賤子(八歳)の父、勝次郎は旧会津藩士林長助の二女希いと再婚
七五	八	山本八重子の兄覚馬(一八六九より京都府顧問)広大な桑畑を寄贈し、新島襄と同志社を設立

一八七六	九		山本八重子(二二一歳) 新島襄(三四歳)と結婚
七七	一〇		この年より八二年まで六年間、新島八重子の母、佐久子、同志社女学校の舎監として協力する
八二	一五		若松賤子、フェリス英和女学校を一八歳で卒業し、引続き教師として母校に勤務(退職は一八八九年)
			山川捨松、アメリカ最古の女子大学バッサー・カレッジを優秀な成績で卒業
八三	一六		山川捨松(二四歳)後の元帥・陸軍大将大山巌(四二歳)の後妻として嫁ぐ(一一月八日)同月二八日は鹿鳴館時代の幕明けとなる(結婚披露宴には日本人約八百・外国人二百を招待)
八四	一七		大山捨松 長女久子以下二男二女を生む 鹿鳴館で婦人慈善会開催・毎週月曜王朝ダンス練習
八六	一九		一一月三日の天長節、井上馨外相夫妻の主催で、鹿鳴館に約一六〇名を招待する
八七	二〇		鹿鳴館の使命を終え、廃止してもという声が出始めてくる
八八	二一		若松賤子(幼名島田甲子 改名嘉志 号しづ子)(二四歳)は巌本善治(二五歳)と結婚
八九	二二		瓜生岩子、福島救育所を創設(設立を小田信道県知事に出願中の処許可を得る)
九〇	二三		新島八重子(四六歳)病弱であった夫・襄(四八歳)と死別 若松賤子(小公子)を翻訳
			大山巌・捨松の新築した穏田の邸宅に、天皇・皇后・皇太后の行幸啓を賜わる
九一	二四		若松賤子(二七歳)三児(一男二女)を生む
九二	二五		瓜生岩子による福島瓜生会・若松育児会をはじめ、福島県内三〇ヵ所に育児会を開設 更に福島・若松などに「済生会病院」を創設
九三	二六		海老名隣、私立若松幼稚園(県内一番目)を開く のち私立聖愛幼稚園の開設にまで発展 これを基盤に、会津若松の女子教育・幼児教育の輝かしい前途を開く
			若松賤子、肺病のため、三三歳の若さで亡くなる
九六	二九		瓜生岩子(六九歳)病没
九七	三〇		大山捨松、津田梅子の女子英学塾創立に当り、校資募集委員会会長として奔走
一九〇〇	三三		大山捨松、日露の開戦により、銃後婦人の代表として、献身的な活動を行なう(慰問袋の発送・留守家族の見舞=食糧・燃料、病人看護、仕事の世話)
〇四	三七		
〇八	四一		大山捨松、海軍兵学校を卒業した長男高の事故死にあう
〇九	四二		海老名隣、六一歳で没する 時に夫・季昌は六七歳
一九	大正八		大山捨松六〇歳を以て不帰の人となる(夫巌は三年前の大正五年七四歳を以て没している)
三二	昭和八		新島八重子、京都の自邸で永眠(八八歳)